

国指定史跡・米子城跡 現地説明会資料 (二の丸柵形の調査)



令和4年(2022年)3月26日(土)
鳥取県米子市

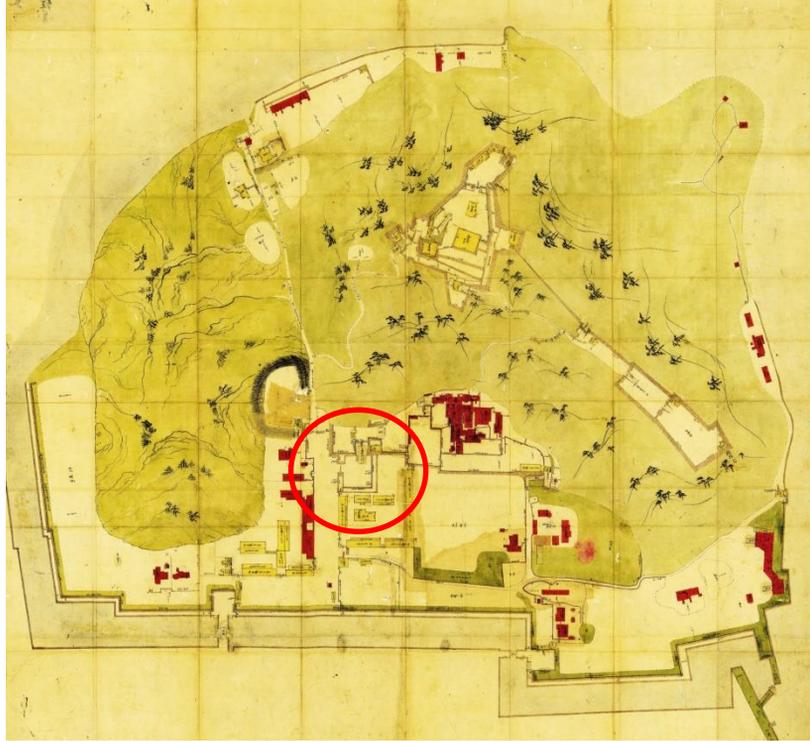
はじめに

米子市では、令和3年(2021年)3月26日に国史跡に追加指定された、米子城跡三の丸(旧湊山球場)の整備を目的とした発掘調査を進めています。令和3年度には、三の丸米蔵と園路部分の発掘調査及び、二の丸枅形の発掘調査を行いました。

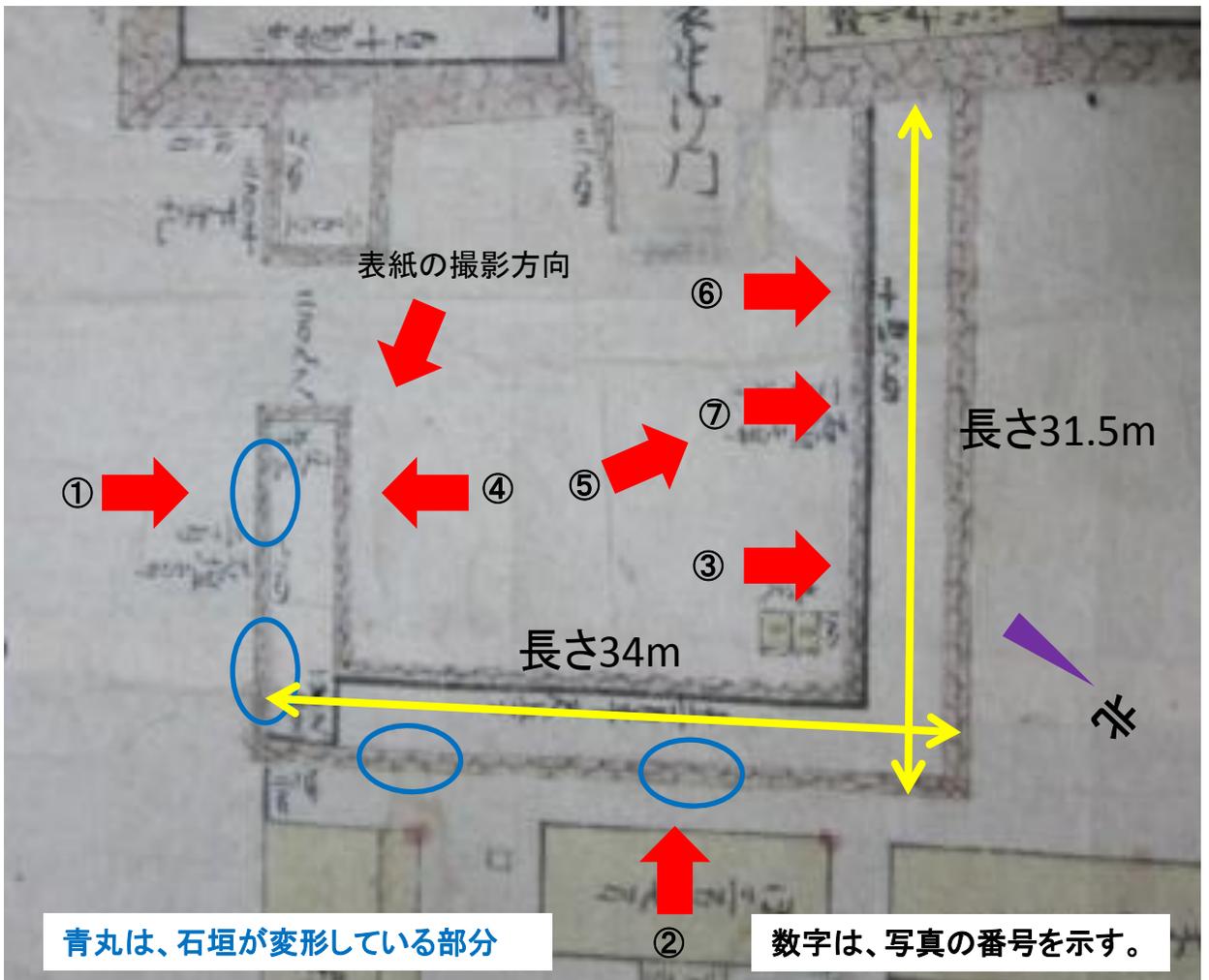
二の丸枅形の発掘調査は令和2年度より継続しており、昨年度は試掘調査と石垣カルテ※の作成を行いました。その結果、江戸時代の石垣の高さが4mもあったことが判明しました。数ある米子城の石垣の中でも、見ごたえのある石垣の一つです。

今回は、劣化が進行している石垣の修理を行うために枅形の下層に埋もれている部分の発掘調査を行い、石垣カルテを作成しました。

米子城を訪れた人が最初に目にするこの石垣を、今後どのように活かして整備するのか、大きな課題が見えてきました。



「米子御城平面図」(江戸末期) (米子市立山陰歴史館所蔵)



「米子御城平面図」(江戸末期)の枅形部分 (米子市立山陰歴史館所蔵)



写真1 石材の割れ



写真3 加工途中の矢穴(やあな)



写真2 石が抜けた部分に小石を詰めている

調査結果

調査前の柵形は、34m×31.5mの範囲に高さ2.5～3mほどの石垣が巡っていましたが、更に下層を掘り下げた結果、高さが4mもあることが判明しました。

柵形の下層は、明治時代後期から昭和20年頃までこの丸付近で稼働していた陶器窯、「米城焼(べいじょうやき)」の失敗品や窯道具が大量に埋められていました。

柵形の石垣は、垂直に近い角度で積み上げられていますが、道路に面した2ヶ所と北東側の2ヶ所で石垣の顕著な変形が認められました。また、石が欠落した部分に、細かい石を詰めて修復している状況や、間詰石がほとんど無くなっている部分があることが確認されました。このような現象が起こるのは、柵形の上に生えていた樹木の根が成長したことによって、間詰石が内側から外側へ押し出されたために抜け落ちたと考えられます。



写真4 間詰石(まづめいし)が欠落した部分



写真5 二つの鏡石



写真6 左の鏡石(高さ1.8m、幅2.1m)



写真7 右の鏡石(高さ1.7m、幅1.9m)

石垣の積み方

今回は遺構保護のため、江戸時代の整地面までの検出に留めています。このため、石垣の基礎構造に関する情報を得ることはできませんでしたが、石の積み方や使用する石材の大きさ、加工方法について新たな知見を得ることができました。

現在見えている石垣は、一段目は石の大きさが不ぞろいの部分もありますが、全体的に見ると大きな石を数段程度並べる「布積(ぬのづみ)」で築いています。また、枡形に入った正面には侵入してきた敵を威圧するために設置されたと考えられる「鏡石(かがみいし)」が置かれています。今回の調査で、隣にもう一個大きな鏡石があることが判明しました。

石の大きさは、枡形の内側では大きなものが使われていますが、外周側では小さな石や未加工の石が多く使われています。枡形の内外で使用する石の大きさや加工度が異なる点は、人が通行する内側を立派に見せるための工夫と考えられます。

※ 石垣カルテとは、石垣の現状を写真や3Dレーザー測量によって記録することで、突発的な災害などで石垣が損壊した後に、速やかに修理を行うための基礎資料となるものです。